慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●診療時間＝午前9時～午前11時
●電話＝（3353）1211（大代表）

KEIO 150
Design the Future

第77回 北里記念式典挙行

北里賞　伊藤　圭介（日本学術振興会　海外特別研究員・ハーバード大学医学部腫瘍遺伝学部門／79回）

北里賞　佐野　元昭（坂口光洋記念講座　再生医学　専任講師／71回）

北島賞　金井　隆典（内科学　消化器内科　准教授／67回）

六月十二日午後一時より第七十七回北里記念式典が北里講堂で行われた。初代医学部長である北里柴三郎博士のご功績を讃え、毎年この時期に行われる。来賓として明治製菓株式会社最高顧問、慶應義塾理事・評議員で北里柴三郎博士のご令孫北里一郎氏、北里研究所理事長／学長・柴忠義氏、同常任理事・石館武夫氏、土本寛二氏、同理事／北里研究所病院長・山田好則氏、同理事・水本清久氏が出席された。

塾からは末松誠医学部長、戸山芳昭病院長、比企能樹三四会長、福田恵一医学部長補佐らが来賓を迎えた。はじめに一同北里柴三郎先生への黙祷を行ったあと、末松医学部長より「今年慶應義塾は百五十年を迎えるにあたり、北里先生から連綿とつづく北里学園、北里研究所とのご縁をこれからも大切にしたい。また、本日北里賞、北島賞を受賞した研究者のような若手研究者を育成するために、大学院奨学制度など最大限の努力をしている」と挨拶がされた。

続いて比企能樹三四会長より「先日、ドイツでの学会の折に、ご招待を受け立ち寄ったドイツ学士院は北里先生が学ばれたその場所で、先生のこちらでの素晴らしいご業績に思いをはせた。その北里先生が初代医学部長として始まった慶應義塾医学部の後輩たちが慶應義塾百五十年にあたり、今後も素晴らしい活躍をしていって欲しい」と激励の言葉が述べられた。続いて北里一郎氏からは「今年は柴三郎がコッホ夫妻を日本に招待して百年が経つ。そして初代医学部長として、塾医学部の立ち上げに関わったことが、本日の素晴らしい研究発表につながっていることを誇りに思う」と北里賞、北島賞の受賞者への礼賛があった。

その後、三四会賞の授与が行われ、先に挙げた北里賞二名、北島賞一名が発表され、表彰された。引き続き、受賞者による世界的評価の高い最新の研究成果の発表が行われた。

（写真上）北里一郎氏（写真下）本年度の受賞者たち

第一部 特別座談会

慶應義塾創立百五十年
～医学部・病院の未来を見据えて～

聞き手　比企能樹（三四会会長）

今年、慶應義塾では百五十年を迎えましたが、百五十年記念事業は、医学部・病院としても「世界に冠たるメディカルセンター」を目指して飛躍、改革を遂げる好機です。すでに新棟設立の計画などがありますが、塾全体としての記念事業の中で信濃町改革はどれくらい考えられているのか、三四会員としては気になるところでもあります。そこで今回は、三四会の比企会長を聞き手に、末松医学部長、戸山病院長を迎えて、創立百五十年記念事業の計画と現状について話し合ってもらいました。また、記念事業を推進するにあたって、三四会としてどのように募金活動を行っていくのか。さらにその募金によって信濃町がどのように変貌を遂げていくのか、今後の構想を交え、分かりやすく説明してもらっています。

医学部長　末松　誠

比企　本日はお集まりいただきありがとうございます。創立百五十周年記念事業の準備委員会が結成されてから二年半以上が経過しましたが、今年になってようやく信濃町キャンパスに関する報告が出てくるようになりました。ご承知の通り、記念事業は塾全体のものであるため、なかなか信濃町再興についての話が進まなかったのが事実です。しかし、二月四日に行われた記念事業委員会で、新病棟建設に関する報告もなされるなど、ここへ来て急速に進み、次世代の慶應医学発展に向け、重要な局面を迎えたと痛感しています。ここに至るにはこれまでの医学部長と病院長、そして戸山病院長と末松医学部長のご苦労があり、プロジェクトも刻々と進化を遂げてきました。そこで、現時点ではどのようなビジョンを持って進んでいるのか、ご説明いただけますでしょうか。

末松　改革刷新プロジェクトが始まってから一年、新執行部体制になってから早七カ月経ちましたが、これからの医学部をどう動かしていくかを決める仕組みはどんどん変わってきています。具体的な動きとしては、改革刷新プロジェクトが三月をもって終了。教育・研究、病院の経営改革、病院の将来構想、情報環境の整備事業という四つのタスクフォースが起ち上がりました。

九年後に医学部は百周年を迎え、その少し前には新病棟ができあがることになっていますが、医学部百周年に向けて、我々はどういう医学部・病院でありたいのか。百五十周年となる今年はそれを考える絶好の機会だと考えています。今回、塾はキャッチフレーズとして「世界を先導する」といった言葉を掲げていますが、どんな言葉で表現するかは別としても、とにかく医学部と病院とが一体となって世界一素晴らしい医学部・病院を作っていこうということが目標です。

そのために絶対に必要なのは、学外にいるOBの先生方のご支援です。私と戸山先生とは、時間が許す限り三四会支部会に出席し、三四会員の先生方ともお話しして参りました。その中で、皆さんが医学部・病院に対して大きな期待を寄せられていることを感じる一方、大変厳しい、健全な批判精神で見守っていただいていることも感じました。

先般出席した関連病院会の理事会でも、いつになく激しい議論になりました。議題は医学部・病院を中心としたネットワーク構築のあり方についてです。我々が目指すのは、関連病院と医学部・病院とがシームレスに繋がるネットワークを構築すること。患者さんの紹介の相互やりとりはもちろん、学外の病院にいても慶應にいるのと同じような環境で教育素材に触れたり、最新の臨床研究の情報にアクセスできる。そんな仕組みを作っていくことを医学部執行部では考えています。さらに、教育中核病院の評価を行うために、連携協議会を発足。大学から一方的に評価するのではなく、相互にチェックし合うことで、お互いに切磋琢磨して高め合う仕組みを作ることを決めさせてもらいました。

病院長　戸山　芳昭

三四会会長　比企　能樹

比企　信濃町だけが改革の目標となるのではなく、信濃町を中心とした大きなネットワーク全体として良くしていこうという考え方なのでしょうか。

末松　そうです。ネットワークの中には慶應大学以外のたくさんの医学部、医科大学があり、三四会員の先生はもちろん、三四会員ではない先生方とも緊密な連携をとらなければなりません。そういう大きなネットワークを活かし、大学病院連携型の後期研修医や卒前卒後一貫教育の仕組みなどを作っていきたいのです。

また、いわゆる紹介・逆紹介といった病診、病病連携といったネットワークだけでなく、慶應を卒業した若手の先生たちが出向先でも同じような研究環境、臨床情報などを使えるようなITを駆使したネットワーク整備も欠かせません。現時点では世界に冠たる研究環境と呼ぶには十分とは言えません。しかし、以前と比べて、現在の競争的研究資金の獲得状況は目を見張る勢いで伸びています。グローバルCOEの採択も昨年はありましたし、今年も非常に期待のできるプログラムが提案されています。再生医学や細胞と代謝の領域では、COE以外の競争的研究資金も獲得できました。それから臨床の若手研究者が、大学にいても、大学外にいても、ユビキタスに教育・研究を享受できる環境を確実に作っていきたいと思います。

戸山　末松先生がお話しになった通り、ソフト面においてもハード面においても、信濃町キャンパス全体が新たなスタートの時期を迎えたと感じています。それは次の百年に向けての始まりとも呼ぶべきもので、慶應義塾の創立百五十年記念事業と一体となって動いています。

創立百五十年事業のファーストステップとして大京町の別館が壊され、臨床研究棟2ができますし、二十一世紀の医療にとって大変重要な予防医療センターもできます。その上で、悲願である新病院棟を建てる。ハード面ではこのような素晴らしい一連の流れができてきました。こうしてソフト・ハードともに塾長のいう「世界に冠たる、世界トップクラスの病院」を目指す。それには当然資金面が大事ですから、三四会の先生方と協力していくことが不可欠です。医療連携室ができたことで関連病院との連携が密になり、三四会の先生方とも積極的に関わることができるようになります。これも末松先生が話された、慶應全体でのネットワーク再構築の始まりと言えるでしょう。

慶應義塾創立150年記念事業
信濃町新病院棟建設
三四会募金要綱（概略）

◇個人（三四会員）　一口50万円
役職者２口以上
150年記念としてできれば３口（150万円）
◇法人（医療法人などの名義で寄付される場合）
150年記念としてできれば３口（150万円）以上

募金申込期間：2010年９月まで

何卒、よろしくお願いします。
尚、全塾的なお願いでは「１口１万円からできれば10口以上」となっています。この場合も「信濃町新病院棟建設」の指定寄付にてお願いします。

信濃町リノベーション
〈第四章〉2008

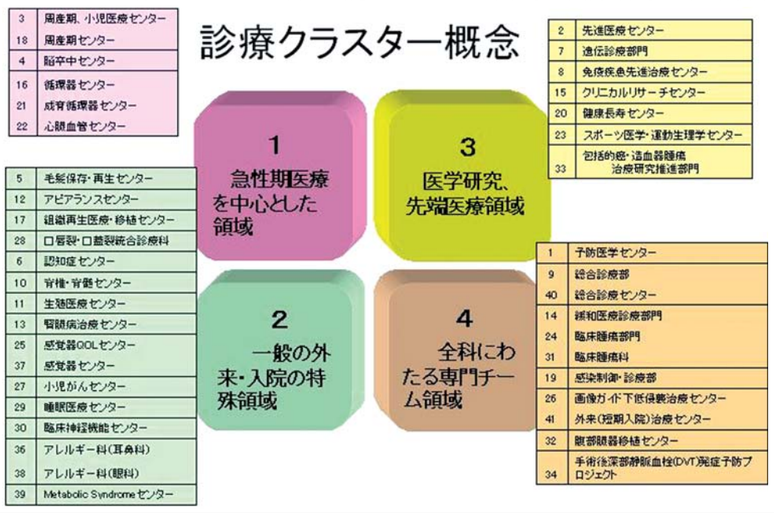
信濃町キャンパス構想
診療クラスターの実現に向けて

消化器内科　日比　紀文

さまざまな方面から医学部・病院の改革が進んでいます。診療クラスター構想もそのひとつです。慶應大学医学部および大学病院の目指す道が模索されているわけですが、信濃町キャンパス構想については、第二章で武田純三医学部長補佐が詳しく紹介されています。私見ですが、慶應大学病院の目指すべきは、まず世界に冠たる先端医療を担う、質の高い機能型病院の構築ではないでしょうか。つまり、従来からの適切な病床数のもとに、量より質を重視するコンセプトのもと、診療クラスターの確立・理想的な外来部門の構築を踏まえて、慶應独自の特色ある病院を造っていくべきと考えています。大学病院の役割は複雑多様化し、高度専門医療と一般診療の両立・医療連携、卒前卒後の教育システムの充実、研究開発の促進と医療関連産業の振興など多くの責務が大学に求められています。一方、患者さんにも理解しやすい診療体制として、これまでの縦割り型の診療科構成では、十分な対応が困難となってきているのが現状です。診療クラスターという概念は、複数の臓器あるいは疾患の専門部門の協力による診療体系を構成し、より効率的かつ質の高い医療体系を築こうというものです。

初代医学部長の北里柴三郎先生は、開校の挨拶で「殊に現下医育の弊風（ドイツ流医学）を刷新して統一ある外国語を専修せしめ、一切の教授法も旧来の面目を一新せしむべく工夫を凝らし、化学科は将来純然たる化学研究所の基盤として独立の経済を営む財源たる様計画を樹てたり」と述べられ、斬新な医学部の開設を目指されました。さらに、附属病院開院式の挨拶では、「我等の新しき医科大学は、多年医界の宿弊たる各科の分立を防ぎ、基礎医学と臨床医学の聯繋を緊密にし、学内は融合して一家族の如く、全員挙って斯学の研鑽に努力するを以て特色としたい」と述べられ、当時としては斬新な診療クラスター構想でした。

今回の診療クラスター構想は、平成十七年十一月に行われた第一回診療委員会において「診療科の再編に関する議事」が提議されたことを端緒として、具体的構想が進められてまいりました。とくに、これまで単一の診療科では限度のあった高度先進医療分野の実現と効率化を目指し、新しい診療体系による慶應義塾の社会的貢献を目標として、議論が進められてきました。各診療部門より診療クラスター構想に対する提言を集めてまいりました。三回にわたり診療クラスターワークショップが開催され、応募された提言の中から複数の演題が選択、審議されました。最終的には、臨床腫瘍、周産期育成、循環器、神経運動器診療、移植再生の五つの診療クラスターについて討議されました。さらに移植再生クラスターはその後臓器移植クラスターおよび組織再生クラスターの二つに分離され、各クラスターのワーキンググループにて、現状での再構築とその問題点・将来新棟建設を仮定した構築について議論され、より具体的な構想を盛り込んだ最終答申書が作成されました。診療委員会では、平成十八年十二月、この最終答申書に、アンケートで提案された多くの診療クラスター案をまとめて、報告書を作成しました。すなわち、応募されたすべての提言およびワーキンググループの最終答申を掲載し冊子として編集し、教授会構成メンバーを中心に配布させていただきました。その概要は武田純三医学部長補佐にまとめていただいた図に示しますが、提案された四十のクラスターは、大きく四つに分けられ、①急性期医療を中心とした領域、②一般の外来・入院の特殊領域、③医学研究・先端医療の領域、④全科にわたる専門チーム領域のいずれかに属します。その他、従来からの内視鏡センター、中央透析室、輸血・細胞療法部、スポーツクリニックなども診療クラスターといえます。現在、感染・制御クラスター



トランスレーショナルリサーチや臨床研究を基礎と臨床が手を結んで進めていくためにも、研究棟からも至近で移動できる（医師導線の効率化）機能的配置を実現すべきでしょう。新研修医制度が始まり、かつ医師全員の有給化をめざしており、過剰な医師の確保は難しい現状からも、できるだけ、医師導線は効率化し、フットワークの軽い、各科の連携のとりやすい形態の構築が重要であると考えます。教職員間の充分な議論のもと、新しい診療体系での慶應独自の病院の実現が望まれます。（52回）

政・官・財から見た慶應医学 ③

新しい時代の慶應医学への期待

サントリー株式会社　代表取締役社長　佐治　信忠

慶應医学は、伝統があり、優秀な先達を数多く輩出し、臨床・基礎研究の分野で素晴らしい実績を残して来られました。私は、今や日本のみならず世界を代表する医学部という評価を得ている慶應義塾医学部に対し、尊敬の念を感じるとともに、塾員の一人として誇りに思っています。

私自身は医学について素人であり、以前は慶應病院を訪れる機会も多くありませんでしたが、今回、慶應義塾創立百五十年記念事業の一環として、大学医学部・病院を世界トップレベルに改革・刷新する目的で設置された「信濃町キャンパス改革・刷新プロジェクト」委員として、慶應医学の改革の議論に参画してきました。そこで感じたのは、いわゆる「経営改革」が必要であるということでした。大学医学部には教育、研究、診療という使命があり、慶應義塾大学医学部もそれぞれの分野での改革が求められていますが、特に「病院経営」についてはかなり大胆な改革を実行していくべきだと感じています。

ボーダレスな情報化社会の進展、グローバルな競争激化、我が国の少子高齢化など、日本企業を取り巻く経営環境は大変厳しくなってきており、各企業が必死になって経営改革に取り組んでいます。これまで様々な規制の中で、医療・病院経営の世界はこの改革が遅れていましたが、もう待ったなしの状況です。病院の改革は日本社会において極めて重要な課題となってきており、現在日本中の病院がこの課題に取り組んでいます。その中で、慶應病院はこの面においても日本のトップランナーであるべきだし、是非そうあってもらいたいと思います。

私は、慶應病院における改革の鍵を握るのは「サービス産業としての視点」「患者さんのための病院という視点」だと考えます。そういった視点で現在の慶應病院を見てみると、診療環境、機材、サービスの面で世界に冠たる慶應医学とは言えない状態で、狭い待合室、患者さんの待ち時間の長さ、入院患者の病室・食事等々、改善すべき点はたくさんあると思います。慶應病院には一日に四千名もの患者さんが訪れると聞きましたが、何かやり方を変えていく必要があるのではないでしょうか。

私が経営するサントリーでは毎年様々な商品を世に送り出していますが、自分でお客様の好みを勝手に決めつけてしまっていたり、商品に対して自信過剰だったり謙虚さが無かったりすると、その商品は売れません。常にお客様に近づき、見つめて、お客様が何を求めているのかを考えるように心がけています。慶應病院においても、患者さん目線での大胆な改革に取り組んでもらいたいと思います。新しい時代の慶應医学を築き上げ、その名声を益々高めていかれることを大いに期待しています。

鑑賞知来

平成十六年度から義務化された臨床研修制度は今年度で五年目を迎えたが、その問題点と改善方策について、十八年十二月から約一年間かけて厚労省の審議会で議論され、本年四月にいくつかの点が改正された。

主な改正点の一つは、研修プログラムの作成や指導体制の確保をより柔軟に行えるようにとの観点から、診療科ローテーションの見直しや研修協力施設の変更等の手続きが簡素化されたこと。この結果、一年目から研修できることとなった小児科や産婦人科などでは、一年次からのいわゆる屋根瓦体制の確保も可能となった。また、内科や外科、救急では、二年目にほぼ一年間を通じて研修することも可能となり、より円滑に三年目以降の研修へつながることも期待される。一方、臨床研修病院の指定基準は、研修体制の質を確保・向上する観点から見直され、新たな基準や経過措置の廃止が盛り込まれた。医学部卒業生数に対し過剰ではないかと指摘されている研修医の募集定員数の是正にも資するものと考えている。

今後も引き続き制度の施行状況を検証し、必要に応じ改善することが重要であるが、当面は臨床研修の到達目標の見直しが大きなテーマと考えている。臨床研修の二年間に何を研修すべきかを定めた到達目標は、医学の進歩や疾病構造の変化などに応じて適宜見直すべきものである。また、医学部教育、特に臨床実習の改善・充実が進む中で、卒前で修得できるものは前倒ししていくなど、臨床実習から臨床研修までを一連のものとらえ、適切に役割分担、連携を図っていく必要がある。これらの取組よっては、臨床研修分野やその期間、あるいは指導体制などにも影響するものと思われる。

本制度の下で研修した医師が将来様々なキャリアを重ねた段階で、国民の皆さんからどのような評価を受けるか、中長期的に検証しなければならない重要な課題である。（宮嵜雅則　66回）